Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-28

批判的安全保障研究における動物論的転回の意味 : ポスト・ヒューマニティの倫理／政治学へ

土佐,弘之

(Citation)
国際協力論集,25(1):65-80

(Issue Date)
2017-07

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009881

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009881

批判的安全保障研究における動物論的転回の意味
―ポスト・ヒューマニティの倫理／政治学へ―[1]

土佐　弘之*

＊神戸大学大学院国際協力研究科教授

はじめに

二一世紀に入って、シンガーらの動物権利論やアガンベンやデリダらの人間―動物政治論などにも触発される形で、動物問題（the animal question）が倫理学・哲学等で活発化に議論されるようになるだけではなく（Cavalieri 2001；伊勢田　2008；金森　2012）、動物福祉等の観点から具体的な公共政策論としての動物政策についても議論がされるようになってきている（Smith 2012；打越　2016）。そうした流れの中で、学際的な批判的動物研究（Critical Animal Studies、以下 CAS）という新たな研究フィールドが切り拓かれてきており（McCance 2013；Taylor and Twine 2014）、その動物論的転回（the animal turn）とも呼ばれる思潮は、政治学や批判的安全保障研究（Critical Security Studies）等にも波及し、特に対テロ戦争を含むグローバル内戦や中東・欧州などにおける難民危機といった文脈における動物化（animalization）の生政治の問題などが議論されるようになってきている。グローバル内戦化に伴う絶対的敵対関係の前景化とそれに伴う敵の非人間化・動物化、またそこから派生している難民・移民の生政治における動物化といった現象は、グローバル・ガバナンスの基調となりつつある「包摂的排除の政治」の矛盾が表出したものともいえよう。

本論攷では、そのような動物化の生政治の問題を念頭におきながら、批判的安全保障研究における「動物問題」のインプリケーショ

ンを探っていく。批判的安全保障研究は、ジェンダー、ポスト・コロニアリズム、ポスト構造主義などの角度から「誰のための誰の安全なのか」という問いを投げかけながら、国家安全保障というヘゲモニックな考え方が孕む問題を解き明かすとともに、人間の安全保障などの新しいコンセプトを批判的に導入することなどを通じて安全保障概念の深化ないしは脱構築を試みてきた。しかし、まさに「人間の安全保障」というコンセプトが示しているように、そこで議論される安全とか平和といった問題構成が、あくまで人間中心主義の視座に立ったものであった。地球環境問題などに見られるように、そうした人間中心主義の視座は大きな限界を抱えていることが自覚されるようになってきている。もちろん人間中心主義批判に対しては、人間社会の中においてさえ不平等、差別、抑圧、暴力などの問題が絶えないのに、人間以外の動物などに対して加えられる危害・暴力など考慮する余裕もないし、その必要性もないといったような反論は当然あるだろう。だが、人間の人間以外の動物に対する暴力、また、それを正当化する＜人間／動物＞の分節化の思惟そのものが、例えば、人間社会内の人種差別や暴力などの問題と根幹のところでつながっているとすれば、人間中心主義の問題を無視し続けることはできないであろう。以下、CASの台頭とその背景について概観した上で、そこにおける問題提起を整理しつつ、「境界と暴力の政治」の文脈における「動物問題」の意味について、特にデリダが主題化した動物政治における生殺与奪の優越的な力に基づく主権という問題と絡めながら検討、考察していく。

1、動物化のメタ・ポリティクス

まず、対テロ戦争という文脈において、人間が非人間化（de-humanize）され動物のように扱われ殺されるという事態が生じている、ということがある。アメリカのオバマ大統領（当時）が2016年8月初旬、「シリアやイラクにおけるISの勢力は弱まってきているが、それに伴ってテロの脅威は世界中に拡散している」と述べたように（“Barack Obama Says Islamic State is losing ground militarily, turning more to terrorism,” *Wall Street Journal,* August 4, 2014）、いわゆる対テロ戦争は、遂行すれば遂行するほど、その終わりは見えなくなり世界中に拡散するというパラドキシカルな状況になってきている。結果として、「あらゆるところが戦場（the everywhere war）」という状況になっており（Gregory 2011）、それと共に、その非対称的戦争の彼方（例えばIS支配地域）では、ちょうど鳥インフルエンザに感染したおそれのある鳥を一斉に殺処分するように徹底的な空爆が行われている。一方で、IS支配地域では、それに応じるように、紛れ込んだ欧米人等を絶対的敵として捕らえ、あたかも生け贄の山羊を葬るように首をナイフで掻き切るようなことが行われている。さらに、そうした内戦状態から逃れた難民たちは、時には動物園内に設置された収容施設に入れら

れるなど、「動物」なみの扱いを受けている（Vaughan-Williams 2015）。このように、対テロ戦争という名のグローバル内戦の深まりとともに、生政治の一部において「動物化（animalization）」という現象が目立つようになってきている（土佐 2016: 1-15）。また対麻薬戦争の名の下で、フィリピンのドゥテルテ大統領が、「麻薬中毒者は人間ではない」と自らの政権が進める超法規的殺人を正当化する発言をしたように（“Drug users aren't human, says Phillipines' Duterte,” AFP, August 28, 2016）、包摂的排除のポピュリズムと動物化の政治との共振も目立つようになってきている。

しかし、このような動物化の政治は、振り返って見ると、特に目新しいことではなく、実に様々な歴史的局面で嫌悪すべき暴力を伴って繰り返し立ち現れて来た（Roberts 2008: 61-72）。その極限的なケースはナチス・ドイツによるホロコーストであろうが、ホロコーストという名称自体がユダヤ教で全燔祭において神前に供える獣の丸焼きを意味していたことは、偶然ではなく、まさに動物に犠牲を強いる暴力と（人の）虐殺とが連関していることを暗示していると言ってよい。そのホロコーストという歴史的経験を原点としながら、チャールズ・パターソンという作家は、動物に対する加虐と人間に対する虐殺との連関性、または種差別主義（speciesism）と人種差別主義との類縁性を丁寧に指摘した書『永遠の絶滅収容所（原題 *Eternal Treblinka*）』を著しているが（Patterson 2002）、その中にも引用されているアドルノのアフォリズムは、まさに動物化の政治とジェノサイドとの強い結びつきを鋭く突いている。

「アウシュビッツは、誰かが屠畜場を見て、あれは動物にすぎないと考えるところなら、どこでも始まる」（Patterson 2002: 88）

関連して、アドルノは、ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』の中における「人間と動物」という一節において、こうした動物化の政治の問題は、ヨーロッパ思想史に通底しているものであることを同時に指摘している。

「ヨーロッパ史の上では、人間の理念は、動物との区別のうちに表現されている。動物には理性がないということで、人間の尊厳が証明される。（中略）理性なき者は言葉を持たない。理性を所有する者は雄弁であり、公然たる歴史をくまなく支配する。地表のすべてのものが人間の栄光を証ししている。戦争と平和、闘技場と畜殺場とを問わず、原始人たちが初めて計画的に群れをなして徐々に象を死に追いつめることを覚えてから、今日見られるような動物界の完膚なき搾取に至るまで、理性なき生物は、つねに理性［の恐ろしさ］を身に染みて知らされてきた。（Horkheimer and Adorno 1997（orig.1947）: 506）」

確かに、以下の引用の通り、政治学の原点

とされるアリストテレスの『政治学(ポリティカ)』において既に、アドルノらが指摘する人間中心主義的論理の展開、その延長線上にある人種差別主義的論理の展開が明確にみてとれる。

「人間は全ての蜜蜂や全ての群居動物よりも一層政治的動物であるということも明らかである。何故なら動物のうちで言葉をもっているのはただ人間だけだからである。――略――言葉は有利なものや有害なもの、従ってまた正しいものや不正なものを明らかにする為に存するのである。何故ならこのことが、すなわち独り善悪正邪等々について知覚をもっているということが、他の動物に比べて人間に固有なことであるからである。そして家や（都市）国家を作ることが出来るのは、この善悪等々の知覚を共通に有しているということによってである。(Aristotle 1984: 4)」（1巻2章、下線部筆者）

「さらにこの（主人が奴隷に対してなすような支配）関係は人間とその他の動物との間においても同様である。何故なら家畜はその自然が野獣より優れたものだが、しかしこれら家畜の全てにとっても、人間によって支配されることがより善いことだからである。そうされることによって彼らは救いを得るからである。そしてさらに、男性と女性との関係について見ると、前者は自然によって優れたもので、後者は劣ったものである。また前者は支配する者で、後者は支配される者である。そしてことのことは全ての人間においても同様でなければならない。だから、他の人々に比べて、肉体が魂に、また動物が人間に劣るのと同じほど劣る人々は誰でも皆自然によって奴隷であって、その人々にとっては、もし先に挙げた劣れるものにも支配されることの方が善いことなら、そのような支配を受けることの方が善いことなのである。(Aristotle 1984: 8)」（1巻5章）

言葉・理性を有し魂のある人間とそれをもたない動物との区別を前提に前者が後者を支配するのは当然であるという、こうした論理は、人間社会の中にも導入され、より理知的な者とより動物的で野蛮な者との区別を導出するとともに、前者(すなわち主人)が後者(すなわち奴隷)を支配することが正当化される。問題は、アリストテレスのテキストに見られるような種差別主義と人種差別主義との強いつながりは、たとえ形式上、奴隷が禁止され人種差別主義がタブーとされても、簡単にはなくらないということであろう。先に触れたように、例えば、対テロ戦争という文脈においては、テロリストは非人間化（動物化）され、人間社会内に埋め込まれている種差別主義的な暴力が行使されることになる。逆説的であるが、危害を加える側は、自らを「理性」を有する者と思っているからこそ、動物ないし動物とみなした人間に対する暴力をエスカレートさせることになる。人間性を守るという名目で、たとえば「保護する責任」という名目で人道的軍事介入によって人を殺戮する

ということが行われるといったことは、その一つの事例であろう（土佐 2017）。つまり原理上、動物に対する種差別主義的な暴力がなくならない限り、それが人間社会内に逆流する危険性は常にあり、人種差別主義的な暴力を廃絶することは困難ということになる。

こうした人間中心主義的な種差別主義的暴力の問題に焦点を当てる見方は、従来の性悪説的なリアリズムないしは動物行動学的な「ベニア説」による暴力問題の捉え方とは着眼点が全く異なるという点は、一応指摘しておいた方がよいであろう。霊長類研究者のデ・ヴァールによれば、「ベニア説」とは、人間の道徳性とは、利己的な攻撃衝動を覆う薄いベニア板のようなものであるとする考え方である（de Waal 2013）。ベニア説の前提となっている、人間の本性は完全に利己的であり、正真正銘の思いやりは存在しないとする性悪説的な人間観は、ホッブズを引き合いに出すまでもなく、政治的リアリズムの中核をなすものでもある。その対極に位置するとされるカント的理想主義も、実はベニア板説の延長線上にある。人間の内にある動物性（本能、感情、野蛮、暴力等）という問題を「人間的」理性によって制御していくことが、まさに道徳的・歴史的進歩であるという啓蒙主義的考え方は、まさに＜人間／動物＞の分節化のうえになりたっているからである。フロイトの文明論も、文明を本能的なリビドーを抑圧するベニア板のようなものであるとみなしている点で、ほぼ、そうした見方の延長線上に位置づけることができよう。ホッブズをはじめとする政治的リアリズムとカント的理想主義との違いは、理性による制御可能性に対する「信仰」があるかないかの違いに過ぎず、人間の内なる「野蛮な動物性」が問題であるとする点では一致していると言える。政治的リアリズムは、その問題をあえて動物的恐怖に訴えることにより力の問題を力で制御する方策を目指しているにすぎない。動物性の問題を動物性の力を借りることによって制御しようとする方策、つまり毒を以て毒を制する方策を目指している政治的リアリズムは、ベニア板の有効性、つまり理性・共感・利他主義というものに懐疑的で、自らの力に自信をあまりもてない人間中心主義の亜流と位置づけることもできよう。それに対してカント的理想主義は、人間に内在する動物性の問題を認めた上で、ベニア板の有効性をより信じる人間中心主義の本流と位置づけることができよう。

しかし、デ・ヴァールは、ボノボ研究等から得た知見を生かし、「動物的＝利己的ないしは攻撃的」という見方は必ずしも正しくなく、人間を含む動物の中に共感、利他主義、社会的協調性や平和的解決志向といった特性を見いだすことができると指摘し、暴力の問題は必ずしも理性によってコントロールできない動物性に起因するものではないという問題提起をしてベニア説を棄却している。デ・ヴァールの問題提起は、批判的動物研究においても、とても重要なインプリケーションをもつ。先に述べたように、アリストテレス以来、ヨーロッパ思想史において、本能的動物

は常に理性的人間を構成するための排除項としてあった訳だが、霊長類研究からの知見は、特にデカルトが完成させ長い間支配的であった動物観、つまり動物は魂のない本能に任せた自動機械のようなものであるという考え方を否定するとともに、ネガティブなものとして排除されていた動物性ないしは本能には相互扶助など道徳的にポジティブなものも含まれていることを示唆している（Brentari 2016）。この示唆を敷衍していえば、政治的暴力の問題は、薄い道徳的ベニア板を突き破る本能的な動物性によるものというより、＜人間／動物＞の分節化を前提に動物を排除し続ける「人類学機械」（Agamben 2004 (orig. 2002)）、また道具的「理性」をまじえた暴力の優位性の上に成り立つ人間中心主義によるものということになる。次に、そうした点について、最近の批判的動物研究などの知見を踏まえながら、もう少し詳しく検討してみたい。

２、動物論的転回：動物問題（人間中心主義問題）が提起するもの

今まで述べてきた、人と人の間の暴力・搾取関係の問題は人と動物の間の暴力・搾取関係と密接に関連するという議論は、＜人間—動物＞関係の見直しを迫る側面があるが、よりラディカルな立場からすれば、依然として人間社会の利益の観点から見ているという点で、ある種の人間中心主義のヴァリエーションの一つにしかすぎないということになろう。ＦＡＯの統計によると、人類は毎年約560億頭の動物を殺して食べているという。この現実を、どのように見るかということとも関わってこよう（Francione 2010: 2）。奴隷廃止と同様に、動物を所有物（動産）とみなす考え方を廃絶しない限り、動物の解放はありえないといった「動物の権利」の原理主義的な立場からすれば、表層的で改良主義的な動物福祉（animal welfare）の考え方は、その所有的パラダイムの強化を通じて動物に対する搾取を温存することになるので（Francione 2010: 29-40）、動物の生自体に道徳的価値を認める方向での認識の転換が必要ということになる。確かに表層的な動物愛護の態度は暴力における優位性に支えられたものかもしれない。この点についても、アドルノ＝ホルクハイマーは、次のような警句を発している。

「ファシストが見せる動物や自然や子供たちへのやさしさの前提は、迫害への意志である。彼らが子供の髪や動物の毛をもの憂げに撫でるとき、それが意味しているのは、この手でいつでも殺すことができる、ということなのだ。（Horkherimer and Adorno 1997 (orig. 1947) : 520）」

たとえ表面的に優しい動物愛護の姿勢を見せたとしても、それが暴力における優越な関係に裏付けられている限り、相手に道徳的価値を認めない姿勢に転ずることは容易である。それは、ファシストに限らず、種差別主

義という形の人間中心主義を自明のものとしている全ての人間が抱えている問題と言ってもよいのかもしれない。

言い換えると、「（大文字の）動物の死（The Death of the Animal）」、つまり否定的な意味での「動物」ないし「獣」という概念そのものを終わらせていく方向で考えない限り、「動物問題（The Animal Question）」の本質は見えてこないということになる（Cavalieri 2001, 2009）。「動物の権利」論で原理的な議論を展開している一人であるカヴァリエリによれば、道徳的進歩としての歴史は垂直的な関係性をより平等的なものに置換していく過程であり、その延長線上として、人権という規範的概念を事実上モノ扱いしている動物へと拡張していく必要がある。彼女の主張からすると、それは文化的進化のあるべき方向を指し示しているということになる。

しかし人間以外の動物に対して道徳的な権利主体性を認めて平等な配慮を払うといっても、それは、どの範囲まで拡張されるのか。その線引きはとても難しい。一般に受け入れやすいのは知的能力が高く意識があると思われている霊長類やイルカなどへの拡張であるが、知的能力や意識というものを持ち出して線引きをするとなると、逆に、意識のない（と思われる）植物状態の人間に対しては道徳的な権利主体性を認めるべきか否かという問題が生じることになる。道徳的な権利主体性は知的能力をもったパーソンフッド（人格）のみに認められるものであって、類としての人であっても知的能力を著しく欠く者に対しては権利主体性を認めることができないといったような優生主義ないしは差別主義の考え方を容認すると、つまり知的能力の高低が道徳的価値の有無を決定するという論理に従うと、重い知的障害をもつ人には与えられない道徳的エージェンシーが知能の高い霊長類に付与されるという逆説的な状況が生じることになり、言語的理性を理由とする人間中心主義は内部崩壊することになる。アリストテレス以来、言語能力を以て人間と動物を差別するという考え方は根強いが、人間が使う言語は動物が互いにコミュニケーションとして使うシグナル（ジェスチャーを含む）の延長線上にあるに過ぎず、また霊長類などはプロト言語を認識しているとなると（Fouts and Fouts 1993；Miles 1993）、動物には意識がなく道徳的価値を認められないという主張もまた根拠を失うことになる（Cavalieri 2001: 22, 85）。知的能力の高低と道徳的価値の有無を関係づけることで正当化がはかられてきた種差別主義は、結局のところ、強制力を含む暴力的な優越関係によって担保されているだけということになる。

そのことと関連して、主権とは、結局のところ、暴力的優位性による支配（家畜化・奴隷化）に裏付けられた人間中心主義（種差別主義）の表出ではないか、といった問題提起をしたのが晩年のデリダである。彼の講義録『獣と主権者』は例によって議論が迂回を繰り返し迷路のような様相を呈していて凡人にはなかなか理解が困難ではあるが、かなり

強引に纏めると、そこでは、人間中心主義というヨーロッパ思想の限界を示すものとして動物問題が再提起される形で、生殺与奪の優越的な力に基づく主権の政治が根本的に問い直されている（Derrida 2008b, 2010）。こうしたデリダによる動物問題の再提起は、特に大陸系哲学における動物問題・再論を強く促すだけではなく（Berger and Segarra 2011；Calarco 2008；Krell 2013）、1970 年代以来、英米系分析哲学、特に功利主義的アプローチによる種差別主義批判や動物解放論を展開していたシンガーや動物権利論を展開していたリーガンらの議論（Regan 1983；Singer 2009（1975））と相俟って、動物論的転回（animal turn）（Weil 2012）ともいうべき契機をつくるとともに、批判的動物研究の議論にも大きな影響を与えることになった（McCance 2013: 57-85）。

特に「問題は動物が考えるか話すかではなく苦しむかどうかである」といったベンサムの考え方を継承する形で、不必要な苦痛の最小化を主張するシンガーの議論は、工場畜産や動物実験などの具体的な動物問題に対する理論的裏付けを提供する形で大きな役割を果たしたとも言える。しかし、チンパンジーなどに権利を与えるべきとする「大型類人猿プロジェクト」の例に見られるように（Cavalier and Singer 1993）、シンガーやリーガンらの議論は、いずれも道徳的共同体の拡張、つまり人権の動物への拡大適用（動物の擬人化）という形のアプローチをとっているため、伝統的ヒューマニズムの枠内にとどまっていて、デリダたちがフォーカスした＜人間／動物＞の分節化に伴う人間中心主義の問題を克服していない、という批判がある（Weizenfeld and Joy 2014）。

政治学においてリベラリズムの観点からシチズンシップを動物（家畜化された動物、特にコンパニオン・アニマル）へと拡張していくべきだといった等の規範的議論を展開しているキムリカらの動物政治論に対しても（Donaldson and Kymlicka 2011）、ほぼ同じ批判を加えることができよう。キムリカらの仕事は、政治学において正面から動物問題に取り組んだという意味で画期的であったし、主として倫理学として扱われてきた動物問題に対して政治学的アプローチを試みたという点で動物倫理における「政治的転回（the political turn）」を推し進めたという意味でも積極的に評価されるが（Garner and O'Sullivan 2016）、一方で、そのリベラル・アプローチの限界性ゆえに、よりラディカルな「動物の権利」論者からは表層的な改良主義ないし差別を温存した動物福祉論として批判されることになる（Francione 2010: 10-14）。デリダらの見立てによれば、種差別主義の克服を唱える権利論、そしてその前提となっている＜包摂／排除＞の論理を内包している道徳的共同体の考え方そのものが、依然として人間中心主義の枠から出ていないということになる（Derrida 2008a: 27；McCance 2013: 67；Wolfe 2003: ix）。＜人間／動物＞の脱構築を経ながらポスト・ヒューマニティの倫理学／政治学の方向を目指すの

か、(Wolfe 2010)、それとも伝統的ヒューマニズムを動物へと拡張していくのか、このあたりに、動物問題へのアプローチにおける大きな分岐点があると言ってよいであろう。

シンガーなどに代表される動物権利論の限界性の問題は、それだけにとどまらない。そのアプローチは、男性中心主義的な正義論と同じ轍を踏んでおり方法論的個人主義に陥っており、フェミニスト的な視点、特にケアなどの関係性に対する着眼点が欠落しているといった批判がある（Luke 1996（1992））。また個々の生物の苦痛について考慮すべきという方法論的個人主義に立った議論は、生態系の均衡維持のために行われるエコロジカル・ハンティングの必要性等、生態系全体の問題に適切に応答することができないといった問題点も指摘することができよう。つまりシンガーらの方法論的個人主義に沿った動物問題への接近とホーリスティック・アプローチからのエコロジー問題への接近とは、互いに相反する場合がある（Peterson 2013: chapter 6-7）。そうした問題も念頭におきながら、種差別主義の克服、＜人間―動物＞関係の見直しが必要ということになろう。つまり、動物問題を、やや近視眼的になりがちな方法論的個人主義のアプローチだけではなく、より巨視的なアプローチによって大きな文脈に位置づけていく必要もある。

現在、人間中心主義についての批判的省察を迫るような生態系危機（気候変動・生物多様性危機などの地球環境問題の深刻化）が到来しつつあるが、そうした危機は、時代認識を含めた世界認識のあり方そのもの転換を迫っている。従来の完新世（Holocene）という地質年代とは違う、「人新世（Anthropocene）」という新たな地質年代の名称を必要とされているように（Crutzen 2002）、特に19世紀以降のヒトの活動は地球生態系に対して不可逆的で多大な深刻なエコロジカル・インパクトを与えて続けている。動物問題も、そうした「人新世」という時代における生態系危機という大きな文脈の中におきながら再考する必要があろう（Tønnessen et al. 2016）。

３、人間社会内における抑圧･支配との交差：リベラル・アプローチを超えて

以上、人間社会内の暴力のエスカレーションの問題（グローバル内戦化）のみならず地球生命系の危機は、＜人間―動物＞関係における暴力の問題とも連関しており、その問題の根幹には否定的な意味での「動物」を排除し続ける人間中心主義があることについて述べてきた。しかし、ここで再度注意を喚起すべきは、「人新世」という危機的時代を招来している類としてのヒトは決して同質的な集団ではなく、その中においては著しい不平等の問題があるということである（Malm and Hornborg 2014）。そのことを直視するならば、今一度、「動物、自然に対する搾取・支配の問題は、資本主義を媒介にしながら人間社会内の搾取・支配の問題と密接に絡みあっている」といった、一部の批判的動物研究が

提示してきた問題提起に立ち戻る必要がある（Nibert 2002, 2013）。

人による人の搾取・支配と人による動物（自然）の搾取・支配との連関性について着眼した思想と言えば、アナキズム、特にブクチンのソーシャル・エコロジー論が想起される（Bookchin 1991）。ブクチン自身は動物問題に多くを語らなかったが、人間社会内のヒエラルキーと人間の自然に対する支配との連関を指摘したブクチンの見方は、批判的動物研究に適用できる（Torres 2007: 85）。支配関係の廃絶を志向するアナキズムの思想をつきつめれば、その射程は、当然、人—動物関係にも及ぶことになるので、批判的動物研究がアナキズムの思想とも問題関心を共有しながら収斂していくことは至極当然であろう（Nocella Ⅱ et al. 2015）。ジェンダーにおける支配関係に着眼するフェミニズムの思想も同様で、ポルノグラフィと肉食との相同性を指摘するベジタリアン・フェミニズム（Adams 1990）、マスキュリニティと自然の支配との連関性を指弾するエコ・フェミニズム（Merchant 1995）等、フェミニズム思想は、さまざまな形で批判的動物研究に貢献してきた（McCance 2013: 87-103）。動物の搾取・支配との関連で、人の搾取・支配を問題化するとなると、階級、ジェンダー、人種などにおける支配・搾取、そして、そこにおける交差性（intersectionality）の問題に着眼せざるをえなくなっていく。つまり、批判的動物研究は、そして批判的安全保障研究もまた、交差的な抑圧・支配・搾取の問題に注意を払う必要が出てくる（Cudworth 2014；Fitzgerald and Pellow 2014）。

その点と関連して言えば、「動物の権利」論に対するリベラル・アプローチは、そうした交差的な抑圧の問題、その背後にあるネオリベラル資本主義の問題（動物の搾取、人間の搾取）を無視している点で、大きな限界を抱えている（Sanbonmatsu 2011: 26-30）。例えば、先にも言及したキムリカらの動物政治論やアリストテレス的ケーパビリティ論を逆に動物に適用することで正義論のフロンティアを拡大しようとするマーサ・ヌスバウムの動物正義論は（Nussbaum 2006: 325-407）、旧来の人間中心主義的政治学・政治哲学の限界を克服しようとしている点では挑戦的な試みではあるが、シンガー等の議論と同様に、ポスト・ヒューマニスト的ヒューマニズムという本質主義にとどまっているだけではなく（Wolfe 2010: 67）、その個人主義的アプローチゆえに動物の搾取を行う制度が資本主義システムと深く結びついていることなどに注意をはらっていない点で、リベラル・アプローチの本質的な限界性を示すものとなっている（Janara 2013）。それは政治的リベラリズムに固有の古典的な問題でもあるが、基本的に個人主義的なリベラリズムは政治の問題から経済の問題を排除することで政治問題が脱政治化していくとともに支配・搾取の問題を不可視化してしまう傾向をもっている。そうしたリベラリズムの落とし穴を回避しない限り、政治的共同体を、いくら開かれたものにしようとしても、その排除の機制

は逆に強まっていくことになる。

今まで、動物とそれを表象する人（蛮人）を排除し続けることによって初めて成立する政治的動物としての人間は、自らが構成する政治的共同体における排他性を必然としてきた。しかし、歴史が示す通り、その排除性は危機的時代状況と連動しながら非常に強まることがあり、時には大量殺戮を含む深刻な暴力的排除性の問題を引き起こしてきた。そして現在、対テロ戦争や難民危機を含むグローバル内戦状況が示すように、ネオリベラルなグローバル・ガバナンスにおける包摂的排除の論理は、日に日に排除の要素を強めている。そして、＜人間／動物＞の暴力的関係性が人間社会内のみならず人間を含む地球生命系全体にも強く反映されるようになっている。そうした危機的状況を目の前にして、批判的動物研究の知見などを踏まえた、人間―動物関係の再考がより一層必要とされてきている。実際、国際政治を批判的に検討・考察していく上でも、そうした人間中心主義（種差別主義）の政治の問題をあわせて考えていく必要があることが指摘されるようになってきている（Youatt 2014）。こうした流れを受けて、批判的安全保障研究もまた新たな課題を突きつけられている。批判理論の原点が解放への関心にあったとするならば、批判的安全保障研究もまた、単に人間の解放だけではなく動物の解放へと、その射程を広げていきながら、動物論的転回を通じた認識論的転回を遂行していかなければならないであろう。それは、人間／動物、文化／自然、主体／客体の分節化を超えていくポスト・ヒューマニズムの新しいパラダイムへの転換でもある。

むすびにかえて：種差別主義という人間中心主義を超える文学的想像力

しかし、種差別主義は「自然な」考え方としてあまりにも支配的であるがために、それを克服していくことは極めて難しい。種差別主義を克服し、生き物の内在的価値を認める方向で道徳的判断を拡張していくためには、ヌスバウムも指摘しているように、ある種の想像力、たとえば文学的想像力が必要なのかもしれない（Nussbaum 2006: 402）。その点で、ノーベル文学賞作家でもあるクッツェーがプリンストン大学タナー記念講演において発表した小説『動物のいのち』（「哲学者と動物」と「詩人と動物」の二編）は、狭隘な理性主義を克服し、新たな人間―動物関係を作り出していくための想像的飛躍の必要性を説いたものとして大変興味深いものである。小説の中の主人公であるエリザベス・コステロの講演という形をとりながら、クッツェーは、ネーゲルの有名な論文「コウモリであるとは、どのようなことか」を引き、「そのような質問に答えを出せるようになる前に、コウモリの感覚様式をとおして、コウモリの生活を経験することができなければならない」という哲学者ネーゲルの主張は間違っていると批判した上で、「生きているコウモリであるということは、充足した存在であるということです。（略）充足した存在であるということ

は、肉体の魂が一つになって生きているということです。充足した存在であるという経験のひとつの呼び名は喜びなのです。」と記している（Coetzee 1999: 52-53）。つまり、我々は哲学者の理性によってコウモリがどのように現実世界を経験しているかを知る由はないが、詩人の共感的想像力によって動物の充足した存在を感じとることは可能であると主張する。共感的想像力の喪失は、屠畜工場に送られる牛たちに無関心である我々の日常と同様に、トレブリンカの最終収容所に送られるユダヤ人の運命に無関心であったポーランド人たちにも看取できる。では、そうした冷たい理性的な無関心と対極にある共感的想像力とは、どのようなものであるのか。テッド・ヒューズの詩「ジャガー」などに言及しながら、クッツェーは次のように述べる。

「ジャガーを身体化することによって、ヒューズは私たちに、私たちも動物を体現できることを教えています——今まで誰も説明したことがなく、これからも誰も説明しないようなやり方で精神と感覚を混ぜ合わせる、詩的創造と呼ばれる方法で教えているのである。」

それは、デカルトの「我思う、ゆえに我あり」（その延長線上にある動物機械論）に対するアンチ・テーゼでもある、デリダの「動物を追う、ゆえに私は（動物）である（Derrida 2008a）」を彷彿とさせる内容でもあるが、逆に、理性を批判する外側の視点を否定する狭隘な理知主義が勝利すると、人間—動物関係は、どうなるか。クッツェーは、コステロの口を借りる形で（腹話術を使いながら）次のように語っている。

「昔は、人間が理性に従ってあげた声に、ライオンの唸り声や牡牛のなき声が立ち向かいました。人間はライオンや牡牛に戦いをしかけ、何世代もの後にその戦いに完全に勝利をおさめたのです。今日では、こういった生き物たちはもう力をもっていません。動物たちは私たちに向かうのに、沈黙しかもっていません。何世代にもわたって、勇敢にも、私たちの捕虜は私たちと話すのを拒否しています。レッド・ペーター（筆者注：カフカの小説「あるアカデミーへの報告」の主人公である猿）を除いては、大型類人猿を除いて、すべての動物が、です。」

こうした記述を目にして想起されるのが、デリダの講義録でも扱われているデフォーの『ロビンソン・クルーソー』である。このテキストを批判的動物研究の視点から読み直してみると、そこに種差別主義の起源とその展開が見えてこよう。批判的動物研究の視座から見れば、『ロビンソン・クルーソー』とは、孤島漂着の冒険譚というより、環大西洋の植民地主義の延長線上で、まず動物が殺戮・家畜化され、そして「蛮人（フライデー）」が奴隷化されるといった、種差別主義に貫かれた人類史の過程を一人の波乱に満ちた人生に凝縮させる形で戯画化されて描

かれたものと言ってもよい。野生ヤギの飼育（domestication）に成功した後に発したクルーソーのモノローグが、まさに、そのことを物語っている。

「全島の君主である、王であり、支配者であるわたしは、あらゆる臣下に絶対的な支配力を持っていた。わたしは臣下たちを吊すことも、臓物を抜き去ることも、自由を与え、奪うこともできたし、臣下にはただひとりの謀反人もいなかった。」（デフォー　2010: 215）

確かに類としての人間は地球生態系の中で絶対的支配者になってしまっているが、それがゆえに地球という宇宙の中の一つの島そのものの存立そのものが危うくなっている。クルーソーの主権的権力の中核にある人間中心主義（種差別主義）を脱構築していく詩的そして共感的な想像力こそが、動物論的転回をさらに促すものとして、いま必要とされているといえよう。動物や自然への共感、それらとの共生ということで言えば、たとえば、梅原猛や中沢新一が言う「森の思想」というようなものが重要な鍵になるのではないかと思われるが（梅原 2013: 163-207；中沢 1992）、ここでは、その指摘のみにとどめて筆を擱きたい。

謝辞

1　本稿は、日本政治学会研究大会・分科会（立命館大学・茨木キャンパス、2016 年 10 月 1 日）にて報告したペーパーをもとに書き直したものである。討論者等、貴重なコメントをいただいた方々に謝意を表する。

参考文献

伊勢田哲治（2008）『動物からの倫理学入門』名古屋大学出版会
打越綾子（2016）『日本の動物政策』ナカニシヤ出版
梅原猛（2013）『人類哲学序説』岩波書店（岩波新書）
金森修（2012）『動物に魂はあるのか　生命を見つめる哲学』中央公論新社（中公新書）
デフォー、ダニエル（2010）増田義郎訳『完訳　ロビンソン・クルーソー』中央公論新社（中公文庫）
土佐弘之（2016）『境界と暴力の政治学』岩波書店
土佐弘之（2017）「R2P のメルトダウン：UNSC1973 前後の「責任のあり方」をめぐる政治」『国際協力論集』Vol.24（2）、115-128 頁
中沢新一（1992）「解題　森の思想」中沢新一編『南方熊楠コレクション　森の思想』河出書房新社（河出文庫）、10-134 頁

Adams, Carol J.（1990）, *The Sexual Politics of Meat*（Cambridge：Polity（鶴田静訳『肉食という性の政治学』新宿書房、1994 年））.
Agamben, Giorgio（2004（orig. 2002））, *The Open: Man and Animal*（Stanford: Stanford University Press（岡田温・多賀健太郎訳『開かれ：人間と動物』平凡社、2004 年））.
Aristotle（1984）, *Aristotle's Polis*, trans. Carnes Lord（Second edn.; Chicago: The University of Chicago Press）.
Berger, Anne Emmanuelle and Segarra, Marta（eds.）（2011）, *Demenageries: Thinking (of) Animals after Derrida*（Amsterdam: Rodopi）.
Bookchin, Murray（1991）, *The Ecology of Freedom: The Emergence of Dissolution of Hierarchy*（Montreal: Black Rose）.
Brentari, Carlo（2016）, 'Behaving like an animal? Some Implications of the Philosophical Debate on the Animality in Man', in Morten Tønnessen, Kristin Armstrong Oma, and Silver Rattasepp（eds.）, *Thinking about Animals in the Age of the Anthropecence*（Lanham：Lexington Books）.
Calarco, Matthew（2008）, *Zoographies: The Question*

of the Animal from Heidegger to Derrida (New York: Columbia University Press).

Cavalier, Paola and Singer, Peter (1993), 'The Great Ape Project–and Beyond', in Paola Cavalier and Peter Singer (eds.), *The Great Ape Project: Equality beyond Humanity* (New York: St. Martin's Griffin), 301-12.

Cavalieri, Paola (2001), *The Animal Quesion: Why Nonhuman Animals Deserve Human Rights* (Oxford: Oxford University Press).

--- (2009), 'The Death of the Animal : A Dialogue on Perfectionism', in Paola Cavalieri (ed.), *The Death of the Animal [A Dialogue]* (New York: Columbia University Press), 1-41.

Coetzee, J. M. (1999), *The Lives of Animals* (Princeton, NJ : Princeton University Press (森祐希子・尾関周二訳『動物のいのち』大月書店、2003年)).

Crutzen, Paul (2002), 'Geology of Mankind', *Nature,* 415, 23.

Cudworth, Erika (2014), 'Beyond speciesism: intersectionality, critical sociology and human domination of other animals', in Nik Taylor and Richard Twine (eds.), *The Rise of Critical Animal Studies: From the Margins to the Centre* (London: Routledge).

de Waal, Frans B. M. (2013), *The Bonobo and the Athiest: In Search of Humanism Among the Primates* (New York: W.W. Norton & Company (柴田裕之訳『道徳性の起源　ボノボが教えてくれること』紀伊國屋書店、2014年)).

Derrida, Jacques (2008a), *The animal that therefore I am*, trans. M. Mallet and D. Wills (New York: Fordham University Press (鵜飼哲訳『動物を追う、ゆえに私は＜動物＞である』筑摩書房、2014年)).

--- (2008b), *Séminaire La bête et le souverain*, trans. Geoffrey Bennington (1) (Paris: Galilée (西山雄二他訳『獣と主権者［Ⅰ］』白水社、2014年)).

--- (2010), *Séminaire La bête et le souverain* (2) (Paris：Galilée (西山雄二他訳『獣と主権者［Ⅱ］』白水社、2016年)) .

Donaldson, Sue and Kymlicka, Will (2011), *Zoopolis: A Political Theory of Animal Rights* (Oxford Oxford University Press).

Fitzgerald, Amy J. and Pellow, David (2014), 'Ecological Defense for Animal Liberaltion: A Holistic Understanding of the World', in Anthony J. Nocella Ⅱ, et al. (eds.), *Defining Critical Animal Studies: An Intersectional Social Justice Appoach for Liberation*, 28-45.

Fouts, Roger S. and Fouts, Deborah H. (1993), 'Chimpanzees' Use of Sign Language', in Paola Cavalieri and Peter Singer (eds.), *The Great Ape Project: Equality beyond Humanity* (New York: St. Martin's Griffin), 28-42.

Francione, Gary L. (2010), 'The Abolition of Animal Exploitation', in Gary L. Francione and Robert Garner (eds.), *The Animal Rights Debate: Abolition or Regulation?* (New York : Columbia University Press), 1-102.

Garner, Robert and O'Sullivan, Siobhan (eds.) (2016), *The Political Turn in Animal Ethics* (Lanham: Rowman & Littlefield International).

Gregory, Derek (2011), 'The everywhere war', *The Geographical Journal*, 177 (3), 238-50.

Horkherimer, Max and Adorno, Theodor W. (1997 (orig.1947)), *Dialektik der Aufkl rung: Philosophische Fragmente* (Frankfurt : Suhrkamp (徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店、2007年)).

Janara, Laura (2013), *'Situating Zoopolis', Dialogue*, 52, 739-47.

Krell, David Farrell (2013), *Derrida and Our Animal Others: Derrida's Final Seminar, "The Beast and the Sovereign"* (Indianapolis: Indiana University Press).

Luke, Brian (1996 (1992)), 'Justice, Caring and Animal Liberation', in Josephine Donovan and Carol J. Adams (eds.), *Beyond Animal Rights: A Feminist Caring Ethic for Treatment of Animals* (New York: Continuum), 77-102.

Malm, Andreas and Hornborg, Alf (2014), 'The geology of mankind? A Critique of the Anthropocene narrative', *The Anthropocene Review*, 1 (1), 62-69.

McCance, Dawne (2013), *Critical Animal Studies: An Introduction* (Albany: State University of New York Press).

Merchant, Carolyn (1995), *Earthcare: Women and the Environment* (New York: Routledge).

Miles, H. Lyn White (1993), 'Language and the Oran-utan: The Old 'Person' of the Forest', in Paola Cavalieri and Peter Singer (eds.), *The Great Ape Project: Equality beyond Humanity*

(New York: St. Martin's Griffin), 42-57.

Nibert, David (2002), *Animal Rights/ Human Rights: Entaglements of Oppresssion and Liberation* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers).

--- (2013), *Animal Oppression & Human Violence: Domesecration, Capitalism, and Global Conflict* (New York: Columbia University Press).

NocellaⅡ, Anthony J., White, Richard J., and Cudworth, Erika (eds.) (2015), *Anarchism and Animal Liberation: Essays on Complementary Elements of Total Liberation* (Jefferson, North Caroline: McFarland & Company, Inc).

Nussbaum, Martha C. (2006), *Frontiers of Justice: Disability, Nationality, Species Membership* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press (神島裕子訳『正義のフロンティア』法政大学出版局、2012年)).

Patterson, Charles (2002), *Eternal Treblinka: Our Treatment of Animals and the Holocaust* (New York: Lantern Books) .

Peterson, Anna L. (2013), *Being Animal: Beast and Boundaries in Nature Ethics* (New York：Columbia University Press).

Regan, T. (1983), *The Case for Animal Rights* (Berkeley: University of California Press).

Roberts, Mark S. (2008), *The Mark of the Beast: Animality and Human Oppression* (West Lafayette, Indiana: Purdue University Press).

Sanbonmatsu, John (2011), 'Introduction', in John Sanbonmatsu (ed.), *Critical Theory and Animal Liberation* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers), 1-32.

Singer, Peter (2009 (1975)), *Animal Liberation* (New York: Harper Collins (戸田清訳『動物の解放』人文書院、2011年)).

Smith, Kymberly K. (2012), *Governing Animals: Animal Welfare and the Liberal State* (Oxford：Oxford University Press).

Taylor, Nik and Twine, Richard (eds.) (2014), *The Rise of Critical Animal Studies: From the Marging to the Centre* (London: Routledge).

Tønnessen, Morten, Oma, Kristin Armstrong, and Rattasepp, Silver (eds.) (2016), *Thinking about Animals in the Age of the Anthropecence* (Lanham: Lexington Books).

Torres, Bob (2007), *Making a Killing: The Political Economy of Animal Rights* (Oakland, CA: AK Press).

Vaughan-Williams, Nick (2015), "We are not animals!' Humanitarian Border Security and Zoopolitical Spaces in Europe', *Political Geography,* 45 (1), 1-10.

Weil, Kari (2012), *Thinking Animals: Why Animal Studies Now?* (New York: Columbia University Press).

Weizenfeld, Adam and Joy, Melaine (2014), 'An Overview of Anthropocentrism, Humanism and Speciesism in Critical Animal Theory', in Anthony J. NocelleaⅡ, et al. (eds.), *Defining Critical Animal Studies: An Intersectional Social Justice Approach for Liberation* (New York：Peter Lang), 3-27.

Wolfe, Cary (2003), *Animal Rites: American Culture, the Discourse of Species, and posthumanist Theory* (Chicago: The University of Chicago Press).

--- (2010), *What is posthumanism?* (Minneapolis: University of Minnesota Press).

Youatt, Rafi (2014), 'Interspecies Relations, International Relations：Rethinking Anthropocentric Politics', *Millenium: Journal of International Studies,* 43 (1), 207-23.

Reflections on Implications of Animal Turn in CSS: Toward the Ethics of Post-Humanism

TOSA Hiroyuki *

Abstract

CSS (Critical Security Studies) has played a crucial role to deepen or deconstruct the concept of security by scrutinizing the problems with the hegemonic concept of national security and interrogating the question of emancipation such as 'for whom, whose security?' while bringing in the gender, post-colonial and post-structural perspectives toward the marginalized people and introducing the concept of 'critical' human security. However as the concept of human security implies, the problematizing framework for peace and security is always based upon the anthropocentric perspective.

Even among the human beings, there are incessant violence, oppression, exploitation, discrimination and structural inequality. We cannot afford to attend the suffering of animals as a top prioritized issue. However if the dichotomous thinking justifying disarticulation between man and animal is closely related to racism and genocide among the human beings, we cannot continue to ignore the problem of anthropocentrism or speciesism as well as "the animal question". The aim of this paper is to scrutinize political/ethical implication of "the animal turn" and the increasing influence of Critical Animal Studies in CSS.

* Professor, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.